

小田原市・足柄下地区ごみ処理広域化協議会会長の思い

このテーマについての私の思いを、皆さんにお話しさせていただきたいと思います。

私も非常に自然が好きで、高校時代は山登りに明け暮れ、子育て期間中に自然農法の農業をやり、地域のいろんな経済に関わってきた人間として、この「ごみの地域内循環」は非常に重要なテーマでありまして、自分の選挙の中でも当然マニフェストに掲げさせていただいて、ごみというものは、自分の地域の中で処理をし、そして可能な限り、地域で出たものは地域に帰していくということが基本であるというふうに考えておりました。

今回、1市3町の資源化の検討というテーブルで、こういう立場で関わらせていただいているわけでありまして、ただでさえこの今回皆さんにご議論いただきます生ごみや剪定枝の地域内循環というのは、技術的にもなかなか確立されていないテーマであります。

生ごみの地域循環では、全国的に先進地といわれている山形県の長井市というところがありまして、人口3万数千人の純然たる農村地帯なんですけど、そこでは相当な時間をかけて、地元の農家の方と主婦の方たちが中心になって、なんとか地域で採れたものを地域で消費し、そこで出た生ごみをまた地域に帰して、その堆肥でまた地域の農産物が育っていく、土も豊かになる、そういう、いのちを育ていく方向に資源を循環させる取り組みができないかという熱い思いの下に、それでも何年も時間をかけてチャレンジをして、全国に先駆けての地域内循環の仕組みができた地域であります。

その中心人物の「菅野さん」というお百姓がいて、私も大好きな人ですが、この人にいろいろ話を聞きますと、やはりこの生ごみ等を含めたそういった資源を地域の中で循環させていくということは、理想論としては非常に良いわけですが、なかなか実際にやっていくというのは、本当に難しいんだということを感じました。

まずもって、そういったものをどうやって集めるのか。今、燃せるごみの中に一緒になって出されているものを、台所の状況の中でまずそれを切り分けて出すということは、当然お台所を支えている主婦の方たちに大きな負担になる。また、それを収集場所に集めて、可燃ごみとは分けて収集する。で、どこに集めるか。集めたところでも当然発酵の過程で臭いが出る。時間は掛かる。それで、できたものを引き取るだけの農業者の方

たちの協力が必要。また、当然広大な農地というものもなければ受け止められない。そうといったいろんな課題があって、本当に長井市といえども大変苦勞されている。いまだにやはり苦勞をされているんです。

長井市の場合、広大な市域に対して人口3万数千人です。この地域になぞらえていえば2市8町ぐらいの市域面積があって、そこに、いわゆる市街地としては、この小田原周辺ぐらいのものがあるぐらいですから、広大な農地を持っていてそういう状況ですので、ここの地域ではなおのこと難しいテーマであるということは承知をしています。

さらに、いわゆる旅館業や観光業を営んでらっしゃる方も多く、たくさんの方を招き入れている地域であるということで、やはり、先ほども先生とお話しをしていたのですが、いろんな研究で明らかになっているのは、生ごみを出すその原単位として一番大きなものというのは、やはり観光業、特に宿泊産業とか、一番そういったものが出てくるということで、そういうものを地域の経済構造の要として持っているこの地域の中では、なおのことそういう難しさが付きまとうわけであります。

そうは言っても、小田原市も今、焼却炉がもう耐用年数に近づきつつあって時間的なリミットが来ている。また、これまでの一つひとつの自治体単位でやっていくということがなかなか難しくなっていて、やはりこの地域は、将来的には広域で手を携え合って、いろんなことを連携してやっていくという時代が必ず来ると思っています。そういう時代を見据えて、この「ごみを処理する」「資源を生かしていく」という営みも、できるだけ効率よく、お金を掛けないで、協力してやっていくことが求められる。そういう中では、1市3町というエリアの中で、この一番可燃ごみの比重を占めている生ごみ、剪定枝の残さをどうやって循環させるか。それを、いかにお金を掛けずに、いかに少ないボリュームにしてやっていくかということは、避けて通れない課題だというふうに思っております。

また、そういった中で、結論を決めていない、ある程度の試算の段階、やわらかい段階で皆さんに議論に加わっていただきたいということで、この6月に「ごみ処理広域化の考え方」というものを出させていただきました。その中でいろんな試算をしておりますけれども、今の段階でいきますと、この一定の焼却施設ですとか最終処分場の設備を整えるのに200億かかるという試算が出ています。ですが、これも焼却に付する可燃ごみの量を限りなく減らしていくことで、その投資額も限りなく減っていく。そのことによって、それぞれの市町の将来にわたる財政負担も減らしていくことができる。そうい

った、いろんな面で非常に重要な意味合いを、この資源化の検討会は持っているということでもあります。

先ほど委員さんからお話しがあったように、基本的には一つひとつの世帯のなかでやられていることを、今度はこの市町はおろか1市3町という中で、どうやってそれをつないで、一番効率よく、一番お金を掛けずに、また、環境にも負荷を掛けずに、将来に禍根を残さない形でやれるか。この議論は、なかなか日ごろの我々の生活の範囲の中では想像がつかない部分もあろうかと思えますけれども、ぜひ、一番大事なことは、それぞれの現場からのナマの感覚を出し合っていて、それを横田先生のようなご専門の方につないでいただいて、全体として一番いいシステムを組んでいただくということだと思っています。

この地域には、生ごみ等の食品残さの堆肥化に先行的に取り組んでらっしゃる民間の事業者の方たちもいらっしゃいます。また、農業等に取り組みながら、なんとか生ごみを土に戻していく、ごみとして出さないような営みを市民の暮らしとしてやっていくべきではないか、そういうように有機農業であるとか自然農業に取り組んでらっしゃる活動もたくさんございます。ですから、そういったいろんな活動の英知やノウハウを集めていくことによって、この地域の面積に対してこれだけの人口のいる地域でありますから決して容易なテーマではありませんけれども、皆さんのお知恵を出し合っていくことによって、時間は掛かっても、そういう地域の循環の仕組みというものを、きっと見出していける、また見出していかなければいけないというふうに、私は考えております。